

Thème 1

学習経験をつくるフランス語ワークショップ Création des expériences d'apprentissage du / en français

今中 舞衣子
IMANAKA Maiko
Université Osaka-Sangyo
imanaka@las.osaka-sandai.ac.jp

1. はじめに

本論稿は、「より良い学習経験をつくる」ことをテーマとしワークショップ型授業実践を例として実施したアトリエの報告である。当該の活動については英語由来の「ワークショップ」、フランス語由来の「アトリエ」の二種の呼び方があるが、本稿では考察の対象として当該活動を示す場合は「ワークショップ」、ランコントロールで筆者が実施した活動を示す場合は「アトリエ」と記す。

教師が学ぶべきことを設定し、学生がそれを知り、理解し、それから応用する、というひとつの授業の流れがあるとする。一方で、学生自身が自らの学習経験に興味づけをし、学ぶべきことを各自の文脈で発見していく、という授業をデザインすることも可能である。ただし、後者のような活動も、ただやってみた、楽しかった、で終わるだけでは学生自身の深い学びには結びつかない。学習経験は、活動デザイン、道具だて、学習環境、教師からの介入など、さまざまな媒介の働きがあるからこそ、深められていくのではないだろうか。

当該アトリエはフランス語教育に関わるワークショップ実践の具体例を紹介しつつ、参加者自身が学習経験をデザインすることについての気づきや学びを得られるような場をつくるという目的のもとで実施したものである。以下、アトリエの流れにしたがって報告する。

2. 導入の活動

参加者が到着する前に、全員が3~4人のグループで着席できるよう机いすを移動して空間づくりをしておいた。参加者が到着すると最初に、「あなたのことを知るための4つのキーワード」と題したアイスブレイクの活動を行った。折り目によって4つの四角に分かれたA4の白紙を配り、それぞれの四角の中にひとつずつ合計4つ、自分のことをよく表現できると思うキーワード（品詞は問わない）をフランス語で書いてもらった。全員が書き終わると、グループの他のメンバーに自分の紙を提示しながら、なぜそのキーワードを選んだかを説明してもらった。

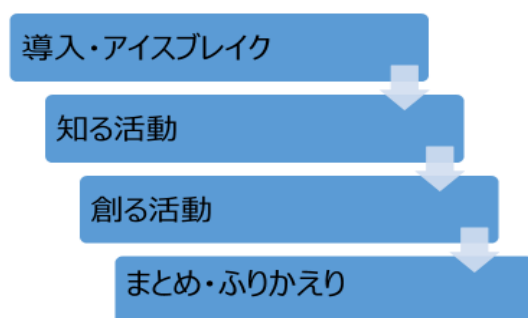
この活動は単なる自己紹介以上にお互いをよく知るための活動として、また事前準備により書かれたキーワードという媒体を用いることで、より相手の話に興味の持てる活動として実施した。参加者の書いたキーワードの例としては *ouverte, gourmande, sourire, culture, curiosité, oublier, maman, bavard, stress* などがあり、氏名・所属・居住地等のよくある情報交換だけにとどまらないやりとりが生まれたようである。今回は教員向けのアトリエという枠組みの中で行ったが、授業で同様の活動を行うことで学生どうしのコミュニケーションを促しつつ語彙を増やすことができるのではと考える。

3. 知る活動

次に、ワークショップの定義や構造、実践例についての説明を行った。

ワークショップの本来の意味は「工房・作業場」だが、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」（中野、2001）、「多様な人たちが主体的に参加し、チームの相互作用を通じて新しい創造と学習を生み出す場」（堀・加藤、2008）といった定義に見られるように、学習・創造において参加者どうしの相互作用をともなう活動が重視される。ワークショップの一般的な構造は下記のようなものである。

ワークショップの一般的な構造



ワークショップの環境をより良いものにするためには、活動の内容やプロセスだけではなく、実施するための空間づくり、活動を媒介する人工物のデザイン、参加者のよりよい関係性を育む共同体づくりなど様々な側面からのデザインとリフレクションが必要となる。このため、ワークショップのファシリテーターには、参加者により良い学習経験をもたらすため、常に試行錯誤を続けることが求められる。ただし、「良い学習経験とはどのようなものなのか」という問いに対するファシリテーター自身の考えが、ワークショップのデザインに反映されることを忘れてはならない。もちろんこのことは、ワークショップ型の授業活動に限らず全ての授業実践において言えることである。具体例として、筆者の考える良い学習経験の特徴を以下に挙げる。

良い学習経験とは？

- ・興味関心、モチベーションの高まり
- ・集中した取り組み
- ・深い思考
- ・創造性の発揮
- ・他者との協力、共有
- ・達成感
- ・生産性のあるふりかえり

上記のような特徴を持った学習経験をつくるため、参加者の活動性を高め、空間・道具を最大限に利用し、共同体と呼べるような関係性を生み出せる場として、ワークショップの考え方をフランス語の授業にも取り入れてはどうかと考えている。アトリエではその参考となりそうな実践例として、以下の4つを紹介した。

| |
|--|
| ① リーディング・ワークショップ（英語授業での実践：長崎、2010） 教師によるミニレッスン、読み聞かせ、ブックトークの後、各学生が本を選び各自で読む。必要に応じて教師からの個別ガイド。読んだ内容についてのスピーチ、ディスカッションを行う。 |
| ② なりきり絵巻（異文化理解のためのワークショップ：下原 in 茂木・編、2010） 「絵巻」についての説明の後、4枚の背景を選び、ストーリーづくり。絵巻の登場人物になりきり、撮影する。撮影した写真をプリントアウト、コラージュして絵巻を作成し、発表する。 |
| ③ 写真表現ワークショップ（初年次ゼミでの筆者の実践） 教室の外に出て、「自分自身を表現する、クラスみんなに知ってもらおう」ための写真を撮って来る。戻ってきて準備ができたならプロジェクタに投影し、理由を説明し、質疑応答をする。 |
| ④ クラスの本づくり（初年次ゼミでの筆者の実践） インタビューする相手を決め、相手のおもしろいところを引き出すような質問を考える。インタビューをして取材メモをとり、写真も撮る。相手の写真つき紹介記事を各自1ページにまとめる。表紙をつけ1冊の本にして配布する。 |

4. 創る活動

アトリエでは、ワークショップの定義や構造、実践例の説明ののち、理想の学習経験のデザインをグループで考える活動を行った。まず、フィンク（2011）を参考に、参加者に下記のような問いを投げかけた。

「思い浮かべてください。あなたには完璧な環境が与えられました。教える場所、使える道具、教授内容などについてなんの制約もありません。学生は非常に優秀でモチベーションが高く、あなたの指示したことを何でもこなします。この夢のような環境において、あなたは学生たちに何ができるようになってほしいですか。どんな人間になってほしいですか。つまり、あなたの授業を受けた学生が他の学生と違うところがあるとしたら、それは具体的に何ですか。」

まずひとりでできるだけ多くの具体的な考えを出してもらい、付箋紙に書いてもらった。次に、付箋紙を大きな紙に貼りつけながらグループで全員の共通点をまとめてもらった。そして、そのような学生を育てるためにどのような学習経験をつくればよいか、ワークショップのタイトルと活動の手順、なぜそのような活動を選んだかの理由、必要な空間と道具のデザインを話し合ってもらった。

ふだん我々は教室、時間、カリキュラム、学生の既有知識など様々な制約のもとに授業を実践している。この活動は、あえてそうした制約を外してみることで、参加者が本当に学生に体験してもらいたいと思っていることは何か、その理由は何か、ということについて深く考えてもらうことを目的とした。

最後にグループの代表者に結果を発表してもらった。紙面の都合により全ては紹介できないが、アイデア例の一部を以下に紹介する。

タイトル (フランス語についての無知 (恥) の知ワークショップ)

| | |
|---|--|
| <p>手順</p> <p>① フランス語圏の国を調べ、そこで話されているフランス語 (音声・語彙) を調べる。</p> <p>② アフリカ仏語、ケベック仏語などで簡単なスキットを作成、発表。</p> | <p>理由</p> <p>思いこんでいるフランス語のイメージから抜け出し、「フランス語らしくないフランス語」を知る。「フランス語らしくなさ」をポジティブに受け取る。 →発音するのが恥ずかしいという壁を取り払う。探究心を養う。</p> |
|---|--|

タイトル (無題)

| | |
|---|--|
| <p>手順</p> <p>① 映画、小説、マンガなど、共通の課題を決め、各自コメント。</p> <p>② 名前をふせてコメントをリストアップ、その中でいいと思ったものを各自選び、自分の意見と比較する。</p> <p>③ 統計をとり、得票の集まった意見についてなぜそのような結果になったかを話し合う。</p> | <p>理由</p> <p>教師からの押しつけにならない。生徒どうしで気づき合う。</p> |
|---|--|

タイトル (留学生向けの PR ビデオ作成)

| | |
|---|--|
| <p>手順</p> <p>① 企画書・コンテンツを考える。</p> <p>② 中間発表会。</p> <p>③ インタビュー協力依頼。</p> <p>④ 撮影・編集。</p> <p>⑤ ナレーション。</p> <p>⑥ YouTube などでコメントをもらう。</p> | <p>理由</p> <p>学生間交流・国際交流。 日常の中の発見。 大学・町のコミュニティとの交流。 礼儀作法。</p> |
|---|--|

タイトル (そうだ! フランスに行こう!)

| | |
|---|--|
| <p>手順</p> <p>① フランスに関する事前学習。</p> <p>② フランスに行き、事前学習で挙げられたことを実地体験する。</p> <p>③ 実地体験の結果をグループで報告、違いを考察し、異なる視点を持つ。</p> <p>④ 外部に向けて発信する。</p> | <p>理由</p> <p>異文化 (差異) に気づく学生を育てたい! フランス語の運用実践。体験内容の共有。教え合い、自分自身で考える。</p> |
|---|--|



5. まとめ

アトリエではより良い学習経験をつくることのできるようなワークショップ型の授業実践について考え、フランス語における実践例を考えてみた。教育実践における様々な制約を外してみることで参加者から提案された理想の学習経験は、知識として、あるいは能力としてのフランス語習得の枠組みから大きく飛躍したものであった。むしろ、上記のような実践は、決まった文法・表現を必ず習得するということや、すべての活動を必ずフランス語で行うということとは相いれないものであると言える。

フランス語を専門として学べる大学がどんどん減少していく中で、我々フランス語教員の働く場も、向き合う学生も、日に日に多様化している。授業を通してどのような学生を育てたいか、そのためにフランス語を使って何ができるか。このような問いに対して、教員ひとりひとりが異なる答えを持つ時代である。学生を巻き込み彼らのモチベーションや活動性を高めつつ、一方で単に楽しく参加できたという印象を与えるだけにとどまらない深い学習経験を促すために、「フランス語が分かる、話せる」という目標を超えたより総合的な視点からフランス語教育を見直す時期に来ているのではないだろうか。

〔参考文献〕 荻宿俊文、高木光太郎、佐伯胖（編）（2012）『ワークショップと学び』全3巻、東京大学出版会；中野民夫（2001）『ワークショップ 新しい学びと創造の場』岩波書店；長崎政浩（2010）「外国語教育における Reading Workshop 導入の試み」『高知工科大学紀要』7（1）、pp.143-151；フィンク、L. ディー（2011）『学習経験をつくる大学授業法』玉川大学出版部；堀公俊、加藤彰（2008）『ワークショップ・デザイン 知をつむぐ対話の場づくり』日本経済新聞出版社；茂木一司（編集代表）（2010）『協同と表現のワークショップ 学びのための環境のデザイン』東信堂；山内祐平、森玲奈、安斎勇樹（2013）『ワークショップデザイン 創ることで学ぶ』慶應義塾大学出版会